

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第548号 平成25年5月24日

若者は文字離れしていない…？

「若者の活字離れ」がいわれて久しいのですが、インターネット上の文字情報やメールなどを含めると、10代と20代は、30～60代よりも文字に接している時間が長い事が、東京大学の橋元良明研究室（情報学環）と総務省情報通信政策研究所による「メディア利用調査」の結果分かりました（4月4日付朝日新聞）。

今時の若者は新聞を読まない、本を読まないという話しは良く聞きますし、実際、私の周りにも、新聞を購読していない若者が少なくありません。若い方々からは、必要な情報はインターネットのホームページ等から入手しているので、新聞を読む必要は感じていないという話しを良く聞きますので、紙媒体に印刷された文章を読まなくなっているという意味での「活字離れ」に歯止めがかかったという事ではなさそうです。

ただ、ネットを利用して電子書籍を読むというのが普通になって来ている現状からすれば、紙媒体にこだわる必要もなく、従来の発想で若者の「活字離れ」を嘆く方がオカシイというべきでしょう。

さて、今回公表された「メディア利用調査」は、昨年9月から10月、任意で選んだ全国の13歳から69歳計1500人に48時間の行動を日記式に記入してもらった方式で行われたもので、その結果、1日の内、動画を除いたネット上の文字系情報、メール、新聞、雑誌、書籍に接する情報行動は、10代が100分、20代が93分、30代以上は70分前後だったそうで、文字への接触時間では10代、20代が30代から60代を上回る結果となっています。

また、1日の内、携帯電話やパソコンなどでネットを利用した人は10代で81%、20代で90%だったのに対して、テレビを視聴した人は10代が76%、20代は79%となっています。

30代以上はテレビ視聴の方が多いとしていますが、10代と20代ではテレビ視聴よりネット利用の割合が高いことが明らかになっており、橋元教授によると、「若者のテレビ離れの傾向がはっきり出た。」としています（4月4日付朝日新聞）。

地下鉄などに乗ると、以前は単行本や雑誌に目を通していている人が多かったのですが、最近は、座席に坐るや否やiPhone等を引っ張り出し見入っている人が目に付く様になりました。

だいたい、塾頭通信だってわざわざ紙に印刷して読むという人はいないと思います。それだけ世の中は紙離れが進んでいるという事ですが、ケータイやパソコンの画面に何時間も見入っているという不健康を別にすれば、若者の「活字離れ」はさほど心配する必要はなさそうです。

ネットには、紙媒体に比べて遙かに多様な情報があり、トータルに見れば、中高年者よりむしろネットに親しんでいる若者の方が多様な情報に接しているという見方があります。確かに、ネット社会の申し子である若者達はネットを使いこなしており、その過程で沢山の文字情報に触れている事は事実だと思います。

ただ、若干気になる事は、文章は「読む」と「書く」には大きな開きがあって、文章を沢山読んでいるからといって文章が「書ける」とは限りません。その意味では、文章は「読む」のと同じ位「書く」事の積み重ねが重要だということです。

もう一つ申し上げて置きたい事は、情報へのアクセスの姿勢についてです。つまり、キーワードを入力して検索すれば、いつでも必要な情報にアクセス出来るという便利さは何物にも代え難いものですが、ただ、複雑で先が読めない時代に生きている者として、必要な情報にアクセスするという姿勢だけでは不十分ではないかと思います。知りたくない情報にも、耳だけはそばだてて置く必要があります。例えば、新聞の場合は、自分が知りたい情報以外の情報も目に入って来ますので、それによって、今まで関心の薄かった問題に関しても事の重大性を認識させられるといった事があります。

ウイングを広げてアンテナを張るという姿勢は、くれぐれも忘れないで欲しいと思っています。(塾頭：吉田 洋一)